

【15】長寿から天寿へ

事故死や自殺などの不慮の死を除く日本人の死因は、長らく、ガン、脳血管疾患（脳出血、脳梗塞）、心臓疾患（心臓マヒ、心筋梗塞）の3つの病気が、その順番を変えながら、三大死因とされてきました。

筆者もそう信じていたのですが、4月9日付の産経新聞の記事によると、2018年（平成30年）以来、死因の第1位はガン、第2位が心臓疾患で、第3位に老衰が上がってきているのだと云います。

老衰死の増加の理由は、記事によると、平均寿命の伸びによる高齢化の進展と、死亡診断をする医師側も検査技術の普及により従来、高齢の死者にも何らかの病因を発見して死因としがちであったが、近年は主因が老衰の場合は老衰死と判定することに抵抗感が少なくなったこと、さらに近年増えてきた介護施設では高齢者の死因を老衰死とすることに病院に比してハードルが低いことがあるとのことでした。

感想めいたことを云うと、かつて人の寿命が短かった時代は、人間は本来与えられた寿命（天寿）があるのに病気や事故で早死にしていると考えられ、平均寿命の長いことが国の先進性の指標と考えられ、年ごとの平均寿命の伸びが国民の関心事でした。

しかし、医学の進歩や社会の安全性が増し、寿命の伸びるに従い長寿の傾向も限界に達し、天寿を全うして死ぬ人が増えてきたということだろうと思います。

新聞の論調も、長寿ではなく天寿を大事にする時代になってきたと締めくくっています。